

「東京左連」の周辺

——『世界文化』・熊沢復六・高沖陽造

絹 川 浩 敏

はじめに

2018年2月、和田洋一の『灰色のユーモア 私の昭和史』の新版¹⁾が刊行された。その帯には、「1938年、京都の片隅で、その大学教員は治安維持法違反で逮捕された。クリスチャンながら共産主義を疑われ、特高の取り調べを受ける日々をコミカルに綴った表題作ほか、昭和のエッセイ群を収録。共謀罪成立の数年後を予兆する名著の新編。」とある。解説は、鶴見俊輔、註・註解を保坂正康が書いている。保坂は和田のゼミ生でもある。何気なく読み始めたこの本だったが、26ページまで読み進んだところで、喫驚した。彼と同じ日の朝逮捕された人物の中に、「ロシア文学の熊沢復六（東京在住）」とあったからである。註もつけられていて、「22 熊沢復六（くまざわ・またろく）」一八九九～一九七一。ロシア文学者。初期の築地小劇場運動に参加。多くのロシア文学とソビエト社会主義文学理論を紹介した。四八年愛知大教授。著作に「人および芸術家としてのゴーリキイ」など。訳書にバルハートゥイ「チェーホフのドラマトゥルギー」など。」とあった。間違いなく、「東京左連」の辛人が編集した『文芸理論叢書』10冊の半数以上の底本とした『現代ソヴェト文学全集 第8巻 文芸評論』の訳者、熊沢復六である²⁾。1980年代末、関西大学大学院北岡ゼミで『雑文』を読んでいたときも、『世界文化』³⁾は参照文献の一つであった。しかし、改めて『世界文化』を見てみると、熊沢復六は16人の同人の中の一人でもあった。熊沢が『世界文化』にソ連の「国際文化ニュース」とりわけ「社会主義リアリズム」に関する情報を掲載していたことは、当時から知っていたが、彼が同人として深く関わっていたことは見落としていた。熊沢は、『灰色のユーモア』にもあるように東京在住であり、単に寄稿していたに過ぎないと思い込んでいたのである。『灰色のユーモア』では、もう一箇所「梯明秀、熊沢復六の両君は、一番しんがりになって、昭和十五年の夏に出てきた。」とあるのみで、ほかに熊沢について詳しいことは何も記されていない。しかし、熊沢がものすごい勢いでソ連のコムアカデミー文芸部の「ソヴィエト文芸百科辞典」の各項を「文芸百科全書」⁴⁾として訳していたとき、彼は『世界文化』の同人であり、それは1936年だったのだ。『世界文化』と熊沢との関係について、もう少し調べる必要がありそうだ。

1、熊沢復六について

熊沢復六は、名古屋市生まれ、東京外語学校のロシア語学科の卒業である。築地小劇場に入るのは、大正14年7月か8月のことである。熊沢自身は、大正10年6月ごろに築地小劇場の共同創設者小山内薫の自宅を初めて訪問したと述べている⁵⁾。築地小劇場が開設されたのは大正13年（1924年）6月であるから、開設前に出会っていることになる。しかし、熊沢復六が築地小劇場関係者とし

て名が雑誌『築地小劇場』に載るのは大正14年8月発行の第2巻第8号からである。前月の第7号に文芸部員として名があるのは「高橋邦太郎・北村喜八」の2名のみである。ただ、この号には、熊沢の北村との共訳、アンドレーエフの「横面をはられる彼」の「築地小劇場第26回演出写真」が掲載されている。文芸部員は、1925年8月から3名、26年5月には5名になる。久保栄、中川龍一が加わるのである。ただ、この時期の築地小劇場文芸部はかなり暇だったようだ。当時演出助手をしていた水品春樹は、「当時の築地の文芸部が、僕の眼にはなにか至極のんきにみえて仕方がなかったのです。僕らがしょっちゅう仕事をしているのに、文芸部員はひょこっとやって来て、ふらっと帰って終うというそれが劇場人的感覚から言うに僕には我慢がならず、小山内先生に言ったんです、先生、劇団の文芸部というものは普通の文学者とは違うのだから、もっと劇場人的存在であってほしいと思います、演出助手なり何かもっと劇場生活者となって芝居づくりの仕事の中に入ってもらいたいと思います、と。そんなことがあって暫らくして、劇場と劇団とがはっきりとなって築地が再出発したとき、高橋邦太郎君が「大寺学校」の青山演出に助手としてつき、いっしょにやった「たのむ」の土方演出に久保栄君がついたんです。文芸部のこうした仕事はもっと早くからやられておればよかったんですが、当時の築地にはどこかのんびりしたところがあったんですね、文芸部員はただ原書を持ってきて誤字誤訳の訂正だとか、訳文の内容の説明とか、文献や参考資料の提供とか、パンフレットの編集といったていどのが仕事だったんですからね。それからみると今の新劇団の文芸部は非常に仕事していますよ。」⁶⁾と語っている。しかし、熊沢が演出助手をした記録はない。28年12月、小山内薫が急死すると、築地小劇場は分裂する。文芸部も分裂し、若手の久保栄、中川龍一、熊沢復六は翌年4月に結成された新築地劇団に加わる。宣言文は久保栄が執筆した。6月に久保が、演劇雑誌『劇場街』を発行したが、熊沢はこの雑誌の編集同人となり、何本か文章も寄せており、編集した号もある。熊沢がいわゆる「左傾」したことがわかるのはこの時期の文章からである。『劇場街』第3号(8月号)に「築地小劇場」を書いており、ここでは「プロレタリア演劇へ——取るべき進路はこの一つしかない」と主張している。翌年、久保は意見の違いから『劇場街』を抜けるが、熊沢は残留している。29年7月に久保栄は新築地劇団を退団する。熊沢もこの時期に退団した可能性が高い。31年、熊沢は鉄塔書院から「マルクス主義芸術史叢書」として3冊の翻訳書を出す。マーツァの『現代欧州文学とプロレタリアート』、『世界芸術発達史』とフリーチェ『二十世紀の欧州文学』である。鉄塔書院は、28年の岩波書店の労働争議で辞職した小林勇が、三木清らの援助で起こした出版社であった。32年には春陽堂からゴーゴリーの『検察官』、プーシキンの『大尉の娘』の2冊を「世界名作文庫」シリーズとして出版する。34年は、米川正夫と共編で『トルストイ研究』を隆章閣から出している。隆章閣は、『唯物論研究』の初期の出版社でもある。

熊沢が、『世界文化』の前身、第2次『美・批評』に参加するのは34年のことである。この加入は、久野収の仲介であった。『戦時下抵抗の研究I』に大津の琵琶湖ホテルでの写真が掲載されている。35年2月から『世界文化』となり、37年10月まで34号が発行されている。熊沢が執筆したのは『世界文化情報』欄であり、相沢というペンネームで「全ソ作家大会」、ソ連で新しい社会主義的美学の必要が叫ばれ、そのためにはヘーゲルの美学の翻訳、デイドロー全集の翻訳、カントの『判断力批判』の再版、ドイツ観念論美学の古典の必要性が叫ばれていることなどを「創刊号」で紹介している。第3号では彼が目していたコム・アカデミー・哲学研究所文学部の研究活動の紹介、チャーホフの生誕75年祭、ソ連学士院の近況、イボリット＝イワノフの死などを報告している。第4号、第5号には、全ソ作家同盟第2回幹事会プレナムの様子を連載し、第6号では、(文化建設の上

で) 技術に関するスターリンの演説、そして第7号『小説(ロマン)の理論』を廻る報告・討論(G・ルカーチ、F・シルレル)を訳している。この翻訳は(一)と題されているが、以降の翻訳は掲載されていない。これは、36年3月、清和書店から『小説の本質 ロマンの理論』として出版された。35年は、三笠書房から『現代ソヴェト文学全集 8 文芸評論』(この本が東京左連・文芸理論叢書の底本である⁷⁾)、『ゴーリキイ文学論』(この本も東京左連・文芸理論叢書で参照された)、『リアリズム』の三冊の訳書を出版している。三笠書房も、唯物論研究会と関係の深い出版社である。『世界文化』では、『現代ソヴェト文学全集 8 文芸評論』が、『新刊批評』欄<11号(11月号)>で、『文芸評論——ゴーリキイ、キルポーチン、シルレル』(三笠書房)として、後述する高沖陽造の『ニイチェと現代精神』とともに紹介されている。

しかし、36年は『世界文化情報』欄での掲載は見られない。16号(4月号)に「シェークスピア研究序論——文学遺産の問題」、20号(8月号)<ゴーリキイを悼む>特集に「ゴーリキイの創作に於けるリアリズム」を寄せただけである。しかし、彼が翻訳した『ゴーリキイ文学論』<14号2月号>、フランツ・シルレル『文芸学の発展と批判』、コム・アカデミー文学部編『小説の本質』(36年 清和書店)<16号(4月号)>、『文芸の本質』、『文芸のジャンル』(清和書店)<22号(9月号)>が『新刊批評』欄や『文芸』欄で紹介されている。36年は、『文芸百科全書』として、上記3冊のほか『リアリズム』の計4冊、独立した訳書としてギダーノフ『文学への道』と上記シルレルのもの、計2冊、そして『ゴーリキイ人生読本(人生読本叢書2)』(六芸社)とあわせて7冊も新刊が上梓されている。多産な一年であった。37年は、『新刊批評』として『ゴーリキイ人生読本』、『リアリズム』が1月に紹介され、翌2月に「最近の『文芸史』二三に就いて」の中で、熊沢の訳業への評価が見られるだけである。この年、熊沢は、『文芸百科全書』の訳業を続け、前記4冊に続けて、『文芸学の方法』、『短編・長編小説』を同じく清和書店から刊行し、『リアリズム文学論』、『マルクスの文学論』(清和書店)、『ツルゲーネフ全集 第2巻 貴族の巢 新脩普及版』(六芸社)を出している。

さらに、38年に『リアリズム論争』、『戯曲の本質』を出版している。

熊沢の『世界文化』への関与が減ったのは、ソ連の文化状況の紹介そのものが難しくなってきたこと、ソ連から『国際文学』のドイツ語版、フランス語版、英語版などを入手し、ロシア語以外からの情報取得が可能になったこと、そしてなにより、熊沢が訳業に精力を傾けたことにあると思われる。

しかし、熊沢の訳業への評価はあまり芳しくない。

当時からすでに、その訳業への批判はあった。戸坂潤は『読書法』の「7 翻訳について」⁸⁾で、以下のように紹介している。

武田武志は『唯物論研究』(一九三七年六月号)のブック・レビューで、ゴーリキイ『文学論』の翻訳三種を比較し、熊沢復六の訳業について、「最後に、この機会にわが国の翻訳について一言したい。ナウカ社版や本間氏訳は大体わかり易い訳であるが、熊沢復六氏のは悪訳である、私は熊沢氏の訳本は大部分通読しているが、あまりにもひどすぎる(例えば『文芸評論』)。ソヴェト文献翻訳の仕事の意義は実に大きい。その任務の大きさにもっともっと自覚して責任ある訳書をどしどし出版していただきたい。ナウカ社版は論文を随分勝手に省略してそれぞれの論文を切りさいなんであるが、良心ある訳者ならばこれを 読者に断わるべきである。吾が国のソヴェト文献翻訳事業に、もっと責任と良心とを要求したい。あえて苦言を呈する」と批判した。これに対して戸坂は、「之では熊沢氏はまるで、無責任と無良心の巨頭であるように見える。果してそう云っていいだろうか。

なる程、私も熊沢氏の訳にはあまり感心はしていない。ロシア語の読めない私でもこれは何かの誤りでないかと思われるような氏の訳に出会った経験もある。最近の一例では『文芸学の方法』（清和書店版）の内で、イギリス文明史を書いた「ボークル」云々という言葉が数カ所出て来たが、之はバックルでなくてはならぬだろうと思った。処が旧ナウカ社版、白揚社新版のミーチン・イシチェンコの『唯物論辞典』にも矢張りバックルがボークルとなっているから、この誤りは殆んど伝統的なものであるらしく、決して熊沢氏一人の誤りではないのではないかと考えた。こういうような翻訳検察官になることは誰にでも割合に容易であり、偶々熊沢訳は検察官の目につき易いのが事実であるというにすぎぬのだが、併しそれがすぐ様責任と良心との問題だと云って了っていいだろうか。」「学的良心というようなものも、出版業者の資本や訳者の経済的社会的な生活条件と大いに関係があるのだから、軽々に言及すべきでない。それに私はひそかに考えるのだが、仕事の分量の大きさというようなことも或る程度まで質の良さの代位をするものであって、或る程度の質を備えたものを多量に産出出来るということは、良質なものを極めて稀にしか発表しないアカデミシヤニズムよりも、却って客観的価値のあることだと思ふのだ。熊沢氏の場合についても大体同じことが云えるのではないかと思う。私のようにロシア語を知らぬ読者は、何と云っても熊沢氏の仕事に随分恩を負うていると云わざるを得ない。」と熊沢を擁護している。

戦後になっても、『討論 日本プロレタリア文学運動史』⁹⁾で、平野謙が、熊沢の訳業を批判したことに対して、久野収が熊沢を擁護している。

佐々木（基一） 熊沢復六氏の訳したコム・アカデミーの百科辞典は「世界文化」のころでしたね。

久野 シルレルの「ファシズム下のドイツ文芸学」「マルクスと世界文学」の翻訳とか、リフシッツの最近また出ている「マルクス・エンゲルスの芸術論」、ああいうものをぼくたちは翻訳して早く出したわけですよ。

平野（謙） どうですか、あのころの熊沢さんの翻訳はちょっと読んだ印象では良くないですね。（笑）

除村（吉太郎） そういうところがありますね。

久野 良くない。熊沢さんのキャリアが哲学者じゃないんですよ。ぼくなんかヘーゲルの美学の所なんか訳してるわけですからね。しかしそういう意味で熊沢さんを非難するのは間違いだ。むしろあの時のロシア文学者の手薄さですな。誰もあんな固いものをやってくれないんですね。熊沢さんも米川さんの所に訊きに行ったりして精一杯やっておりましたがね。あのころはソヴェトでも美学の古典的遺産が問題にされて——ドイツの古典美学であるとか、シルレルとかヘーゲルとかシェリングを取上げて来て美学の理論が進んだときですから、翻訳者がシルレルやヘーゲルやシェリングの哲学をよく知っていなければ無理だ。熊沢氏は外語のロシア語科を出られて演劇に関係しておられたから、いくぶん無理はあったが、ルカーチのロマンの理論などを発表してくれて非常に助かったわけです。

佐々木 ソヴェトで社会主義リアリズムの問題なんか起って来て、あれを理論的にいろんな面から紹介したのは「世界文化」だったと思うんですが。

久野 主に熊沢さんですよ。

熊沢復六は38年6月24日、和田ら『世界文化』同人とともに逮捕され、一番しんがりになって、40年の夏に出てきた。¹⁰⁾

2、高沖陽造について

高沖陽造は、熊沢復六より7歳年下、1906年の生まれである¹¹⁾。広島県三原市の出身で、300年以上続いた旧家の出身であった。父親は村の収入役もやっていたという。しかし、彼が小学校に入る直前、父が米相場に手を出したことなどから家が破産し、極貧生活を経験する。父は、彼が小学校4年生の頃に亡くなる。小学生の頃は、祖父や母の弟の家に預けられたりした。村始まって以来の秀才といわれたが、中学には入れず、高等小学校を途中でやめて、丁稚奉公に出た。大阪、神戸で職を転々としながら、通信教育で英語を学ぶ。1923年4月東京に出て、新聞配達を行ったが、9月の関東大震災にあい、三原に一度帰っている。帰京後、土方をしながら正則英語学校へ通う。ここには1年半くらい通った。翌24年秋、「全日本無産者青年同盟」に加入し、労働運動に入る。ドイツ語も独習した。労働争議に明け暮れる中、共産党にも入党する。28年の第一回普通選挙に候補者の応援演説をするなど関わっている。この間、数度の留置場経験を経て、三・一五事件で投獄される。初めての監獄暮らしだった。市谷刑務所に31年6、7月まで未決のまま留め置かれ、獄中でフランス語の勉強をした。偽装転向をして保釈される。出獄後、労働運動に戻るが、共産党は壊滅状態で組織的連絡は途絶える。

32年に著述活動に入る。三・一五や四・一六事件の被告会議で、栗原佑と知りあい、ハイネの「ドイツの宗教と哲学」を共訳し、33年改造文庫から『ドイツ古典哲学の進歩性』という題で出版した。ここに書いた「解説」が評判になり、一躍有名になった。この時期、プロレタリア科学研究所にも関係し、新島繁と知り合う。長谷川如是閑の『我等』にも寄稿し、知り合いになる。舟木重信とも、栗原を通して交際を深めた。舟木を通して、「ヘルデルの『イエデン』における進化論と弁証法」を『思想』1933年9月号に発表する。高沖編で『ハイネ研究』（隆章閣、1933年6月）も出している。この本には、高沖陽造が「ハイネの宗教・政治・社会観」、林房雄が「芸術家としてのハイネ」、森山啓が「革命詩人としてのハイネ」、舟木重信が「ハイネと浪漫主義」、石浜知行が「ハイネとマルクス」、川口浩が「ハイネ評伝」、そして高沖が「エーヌ・ブハーリン ハイネと共産主義」「オー・ビーハ ハイネとマルクス主義」を訳している。舟木を介してかもしれないが、高沖が、左翼文壇でネットワークを広げたことがわかる。さらに、唯物論研究会にも加入している。高沖の言によれば、戸坂から直接加入を求められ、それも幹事となることを求められたということである。幹事は断ったが、加入し、研究会にも何度か出席し、唯物論全書に『文芸思想史』を書いている。機関誌『唯物論研究』には33年11月から38年7月までに7本の論文を書いている。

熊沢復六とは、清和書店で知りあい、『世界文化』にも2本論文を寄せている。35年7月号「ニイチェおよびベルグソンの思惟と近代思想」、36年7月号「自然主義の社会的性格」である。著書も、『世界文化』で紹介されている。《新刊紹介》『欧州文芸の歴史的展望』〈創刊号〉、前述の『ニイチェと現代精神』〈11月号〉、36年7月号に《文芸》欄で「『芸術学』その他について」で、真田信一に評価されている。この『芸術学』（ナウカ社1936）が、林煥平によって39年に中国語に訳されている¹²⁾。

商業誌・紙にも進出している。『中央公論』に11本（36年9月号から42年1月号まで）、さらに東京日日新聞で文芸評論を38年から始めて40年1月ごろまで続けていたという。演劇にも、熊沢復六を通じて関係し、36年ごろ新築地劇団の顧問にもなっている。40年に検挙され、その後執筆禁止になったというが、『中央公論』の41年1月号と42年1月号にも論文を寄せている。この時期、原稿

料で月に 30、40 円稼いでいたという。「隔月くらいに原稿料を中央公論から 60 円くらい貰っていた。」『文芸思想史』は印税 130 円であった。

3、『世界文化』のこと

前述のように、雑誌『世界文化』は、中井正一らが出していた『美・批評』を引き継いだ雑誌であった。33 年京大事件（滝川事件）の抵抗運動の中で、中井正一を中心に大学院学生代表の一人であった真下信一、文学部学生代表であった久野収が結びつきを強め、事件の政治的敗北を受けて、文化的な抵抗運動の拠点として、『美・批評』再刊の企てが立てられた。折りしも、真下信一は 33 年 9 月、同志社大学予科に就職した。そこには、フランス文学の新村猛、ドイツ文学の和田洋一がいて、この同志社予科左派 3 人組が、再刊『美・批評』の人間関係の楔のような役割を果たすことになる。『美・批評』の再刊を推進したのは、真下と久野であった。京大楽友会館の 2 階小集会室で初会合を持ったのは 34 年 2 月のことだった。33 年はナチス政権奪取の年、フランスではファシズム反対運動が激しく燃え上がろうとした年だった。再刊した第 2 次『美・批評』は、中井ら京大美学専攻を中心にしたモダニスト、真下・久野ら京大哲学のマルキスト、新村・和田ら京大西洋文学のヒューマニスト、そして久野の紹介でロシア文学の熊沢復六が加わる。彼もマルキストであった。第 1 次『美・批評』はどちらかといえば、あたらしい文化領域で前衛的新感覚派的な傾向が強かった。そこへ、真下らマルキスト、和田らヒューマニストが入った。また和田にとっては、32 年の上海事変における爆弾 3 勇士を初めとした国民的な熱狂への恐怖も含めて、カトリック教徒としても反戦平和の志向が強かった。京大事件における学問の自由・大学の自治の問題、同志社大学での右翼学生のスツ処分問題と軍からの大学への圧力など、強弱はあれ、メンバーの危機感は強かった。だから、真下信一の起草した 32 号おりこみ「美・批評に就て」は、「学問をしっかりと勉強しよう、——誇張でも尚更、嘘でもなく、本当に此の気持が、唯、此の気持だけが、この小さな雑誌のまはりに、私たちを集めた。」と学問の重要性を述べている。「マルクスは間違ふかもしれないが、マルクス主義は間違わない。」と公言する真下であったが、『美・批評』は純学術雑誌としての性格は守られた。だが、『美・批評』は 30 号で「ソヴェート作家同盟」の動向の紹介、中井正一「リアリズム論の基礎問題二三」（31 号）、真下信一「レアリズムの論理」（32 号）と、ソ連の社会主義リアリズムの問題を意識するようになり、ヨーロッパでの反ファシズムの動きを伝える「海外情報」の紹介が急務となってきた。また「文芸復興期」になり、「日本浪漫派」が勢いづく状況の中で、これに対抗して「花は大きくとも果のないむだ花であらんよりは、たとえ営みは貧しく、咲く花は小さくとも」、純学術雑誌から、1000 円の供託金を払って、新聞紙法に引っかからない定期刊行物となり、海外情報も扱える商業誌となった。これが、『世界文化』であった。発行部数は 1000 部に満たない雑誌であったが、当時はヨーロッパにおける反戦、反ファシズムの運動を伝えるメディアが少なかった。創刊号では「世界文化の情報と、其の文化に多少とも貢献する理論の翻訳とを成るべく多く載せていきたい。」との抱負どおり、新村はフランスの反ファシズム運動、和田はナチスから逃れて海外に移った文学者の動きを精力的に紹介した。¹³⁾

「東京左連」も、『雑文』で「雑訊」欄を作って、海外事情を精力的に紹介した。『世界文化』も材源の一つとされた。

『世界文化』の同人は、熊沢が最年長で35年当時、36歳、中井35歳、新村30歳、和田32歳、真下29歳、武谷三男24歳、その他多くが30歳に満たない青年であった。東京左連のメンバーも、35年当時25歳以下の若者であった。

新村猛は、「要約すれば」と断りながら、「昭和六年から十二年の秋、同志社大学を辞職することを強いられた時まで足かけ七年間に、日本の内外に相ついで起った歴史上の諸事件やフランスの反ファシスト作家たちの著作や優れた学友たちとの交渉を通じて私は、戦争と平和の問題、民主主義とファシスト独裁の問題、社会主義革命とプロレタリア独裁の問題、人類と民族と階級との関連という問題、マルクス・レーニンの学説における科学研究の意義、またこの学説と科学研究との関連の問題、理論と実践との関連あるいは党派性と真理性との関連という問題、リアリズム、なかんずく社会主義リアリズムという言葉で定式化された文学および芸術の創作と批評の方法論の問題、文化擁護国際作家大会が議題の一つに掲げた文化遺産の摂取と継承という問題、等々のきわめて重要な問題について、生なましい経験を重ねながら、思考を深めたり討議を繰返したりするという無比の良い機会を幸いにも活かすことができた。」¹⁴⁾と語っている。まさに、「東京左連」も、34年から37年にかけて同時代的に経験したのではないと思われる。

だが、1937年秋、新村、真下、中井の3人が、治安維持法違反で逮捕され、翌年春、和田、熊沢らが同容疑で逮捕され、この文化運動は、日本帝国主義によってつぶされた。東京左連の活動は、それよりも早く1937年3月に主要メンバーが逮捕され、国外退去処分にされ、運動はついでるのであった。

おわりに

日本近代文学研究者の祖父江正二氏は、唯物論研究会を評価して次のように述べている。

「プロレタリア文化運動が組織的に活動をくりひろげていた時期には、階級闘争学説の承認、階級対立・階級闘争の文化・思想の領域への反映の承認といった積極的意義を持つ発見が、草創期の未熟さに制約されたため、総じて『近代文化』を『ブルジョア文化』として全面否定する把握が支配的であった。しかし、その運動の諸組織が解体を強いられる一九三四年（昭和九）ごろを分水嶺にして、それ以降、プロレタリア文化運動の影響を受け、その志向をより困難な状況の中でなお展開しようと志した人たちは、かつてとはまさに対照的に、否定的に評価されてきた『近代文化』の積極面をかえって肯定的に押し出し、内外の『中世的野蛮』（－略－）に抗したのであった。これは、重圧の中での一歩後退した戦いでしかなかったろうか。その面はむろんある。しかしすべてがそうだとする『階級』的な評価・把握は、機械的で、貧しく、間違っていると言いたい。このように、きびしい現実と対決することを通して現実に進められた戸坂たちは、発足時にははまれていた非プロレタリア的な要素の積極面をはぐくみ、世界史的な『人民戦線』段階にふさわしい新しい唯物論（＝マルクス主義）的な『近代』の肯定的な思想活動をくりひろげようとしていたと位置づけるべきである。」¹⁵⁾

東京左連のメンバーが東京に来たのは、「分水嶺」の1934年ごろであった。『世界文化』の前身である『美・批評』が再刊されたのが1934年2月であり、『世界文化』と改題されたのが1935年2月であった。東京左連の機関紙『雑文』は35年5月の創刊である。厳しい状況の中で、辛人ら東京左

連のメンバーは、唯物論研究会、『世界文化』の同人たちに学びながら、中国における『人民戦線』段階の文学・思想を模索していたのである。『世界文化』が紹介したヨーロッパの、ドイツ、フランス、スペインの運動は「人民戦線」つまり「統一戦線」の運動であった。中国でも、1935年8月には「八一宣言」が出され、蒋介石の「攘外必先安内」を批判しながらも統一戦線が呼びかけられた。年末には周揚らによって左連が解散され「国防文学」のスローガンが提起される。魯迅らは、周揚らへの不信感から別のスローガン「民族革命戦争の大衆文学」を提起することになる。この「二つのスローガン論争」は、魯迅の死によって収束に向かうが、東京左連のメンバーはこの論争の収束に向けて積極的な役割を果たす。詳細は別稿を期すしかないが、新村猛らが紹介した「行動の統一」という「人民戦線」のあり方が示唆したものは大きいように思われる。

注

- 1) 和田洋一『灰色のユーモア 私の昭和史』人文書院 2018年2月

この本は、3度目の出版である。回想の本体である『灰色のユーモア』は、1957年に雑誌『人民』（未見）に連載され、理論社から1958年に出版された。1974年に第三版が出されたが、1976年に小学館から「100万人の創造叢書」の一冊として、『私の昭和史——『世界文化』のころ』と題名を改め、「昭和初期の政治風景」「『世界文化』とトーマス・マン」「太平洋戦争下の抵抗—明石順三の『灯台社』を中心に」「終戦の年、敗戦の年」の4章が加えられ、「灰色のユーモア」は三番目、つまり「『世界文化』とトーマス・マン」「太平洋戦争下の抵抗」の間に入れられている。人文書院版は、「Ⅰ灰色のユーモア」「Ⅱ私の昭和史」「Ⅲスケッチ風の自叙伝」「亡命について 鶴見俊輔」「註」「註解 保坂正康」と順番を入れ替え、小学館版で入れられた4章はⅡに、Ⅲは、和田の同志社退職の記念論文集『抵抗と持続』鶴見俊輔・山本明編 世界思想社1979年4月からのものである。

- 2) 熊沢復六の『現代ソヴェト文学全集 第8巻 文芸評論』と東京左連の関係については、拙稿「東京左連」の『文芸理論叢書』について、『野草』48号（中国文芸研究会）1991年8月、「東京左連」の『文芸理論叢書』について その2、『野草』57号（中国文芸研究会）、「P110～119」、1996年2月 参照

- 3) 『世界文化』（1935年1月～1937年10月）復刻版全3冊 小学館 1975年5月

- 4) 「コム・アカデミー文学部（編）」の「文芸百科全書」として、熊沢が訳したのは以下の8冊である。

『ロマンの理論 小説の本質』1936年3月、『文芸の本質 文学・文芸学・批評』1936年5月、『文藝のジャンル』1936年7月、『リアリズム』1936年11月（この本ではじめて第4篇と篇名が入り、最後の方の広告で先の3冊もそれぞれ第1編から第3編に位置付けられている。）、『文芸学の方法』第5篇 1937年4月、『短篇・長篇小説』第6篇 1937年6月、『マルクスの藝術論』（篇の記入なし、ただし、以下の『リアリズム文学論』の巻末広告では第7篇の記載がある。）1937年12月、『戯曲の本質』（第8編の印刷あり）1938年1月、いずれも清和書店刊。

このほか、『リアリズム文学論』1937年11月、『リアリズム論争』1938年3月、いずれも清和書店で出版されている。

- 5) 熊沢復六「先生と露西亜」『築地小劇場』第6巻第2号（小山内薫追悼号）1929年2月23日

- 6) 『新劇去来』ダヴィッド社、1971年、226頁

- 7) 前掲注2参照。

- 8) 『戸坂潤全集』5巻 453-455頁、勁草書房 1967年2月

- 9) 三一書房 1955年5月（ここでは1969年1月第2刷参照）

- 10) 和田洋一前掲

- 11) この節での、高沖陽造についての記述は、太田哲夫他編『治安維持法下に生きて——高沖陽造の証言』影書房 2003年6月による。

- 12) 『世界文化』は、1975年小学館より復刻されている。この節の記述は、平林一「『美・批評』『世界文化』と『土曜日』——知識人と庶民の抵抗」同志社大学人文科学研究所編『戦時下抵抗の研究Ⅰ』みすず書房 1968年1月、のち『危機における文化』（白地社 1993年11月）所収を参照した。『美・批評』『世界文化』

については、前掲和田洋一や久野収による回想、座談のほか、新村猛「『世界文化』のこと」（『展望』1974年2月号～75年12月まで断続的に掲載。のち『新村猛著作集』第2巻 三一書房 1994年12月所収）。真下真一と和田洋一の対談「『世界文化』の思い出」（『現代と思想』第2号 1970年12月）、復刻された『世界文化』3巻の巻末に「《座談会》『世界文化』のころ」（新村猛 真下信一 和田洋一 辻部政太郎 富岡益五郎（司会）平林一）などがある。

- 13) 戦後、二人の営為は、『国際反ファシズム文化運動』の「フランス篇」と「ドイツ篇」として、三一書房から1948年10月と1949年3月に出版された。フランス篇は「反ファシズム」と小さい「ッ」が入っている。
- 14) 「一平和活動家の反省——ロマン・ロラン生誕百周年に際して——」『新村猛著作集』第2巻前掲、初出『展望』1966年9月号「平和運動と人民戦線の思想 -- 平和活動家の回顧と反省」、著作集収録に当たって、著者の希望により初稿ゲラのタイトルに戻したと、川村孝則が「解説」で述べている。
- 15) 「『唯物論全書』の思想史的位罫——一九三〇年代の国際的文化動向とかかわらせて——」復刻版唯物論全書別巻『「唯物論全書」と現代』久山社 1991年5月

(本学経営学部教授)